

お世話係

2024.2.8

知り合いの校長先生から、こんな話があった。研修視察で県外の学校に行き、訪問先の校長先生に名刺を差し出したところ、「福島市なんですね。ローマ日本人学校で高澤先生と一緒にだったんですよ」と言われたそうである。この校長先生は、ご夫妻でのイタリア旅行中に、ローマにいる私に会いに来てくれた方である。しばし、訪問先の校長先生との話に花が咲いたはずである。

訪問先の校長先生は、私がローマに赴任したときの2年目の先生だった。他の日本人学校もそうかもしれないが、派遣されたばかりの1年目の教員家族それぞれに、「お世話係」をつける。この役目を2年目の教員家族が務める。異国の地に来たばかりで何もわからない状態である。旅行ではなく、そこで生活するのである。日本で何もわからないとはわけが違う。

教員は、住居と学校との行き来が主なため、まだいい。家族は、イタリア社会の中で生活しなければならない。どこに買い物に行けばいいのか。どうやって清算するのか。バスの乗り方は日本と同じなのか。子どもを遊ばせるような公園はあるのか。一つ一つのことがわからず不安である。そこで、指南役にいてもらえると安心である。それがお世話係である。

私の場合は、福島県から先に派遣されていた教員家族がお世話係だった。心強かった。遠い異国の地に来て、まさかの同県人である。ありがたかった。いろいろなことを教えてもらった。少し慣れてきた頃には、休日に車でちょっとした観光地に連れていってもらった。リストランテ（レストラン）にも行った。お世話係は、何かわからないことがあると、いつでも相談できる存在だった。

私のお世話係である先輩教員は、すごい方だった。達人のような人物だった。理科の先生だった。福島県にある自宅はログハウスである。これを自分でつくってしまったというから驚きである。何年もかけて地道につくり上げていったらしい。真似できない。

ローマでは、現地で車を購入し、帰るときに売り払ってくるのが通常であった。私もそうした。だが、先輩は違った。ローマで購入した車を、そのまま船で運び、日本に持ってきてしまった。ログハウスの自宅駐車スペースにめでたく納まった。その後、海を渡った愛車は、日本の道路を疾走した。あるとき、会議があり、駐車場に行くと、あの先輩の愛車があった。すぐにわかった。他の車とは一線を画す威厳と味わいがあった。ローマで見ていた車が、日本でも活躍していると思うと、何だかうれしかった。その後も、先輩はその車に乗れるだけ乗ったようである。車も幸せだったことだろう。

先輩は退職した後は、スッと教育界を去り、菜園を始めたらしかった。いかにも先輩らしい。このお正月の年賀状には、「養蜂を始めました」とあった。おそるべしである。さすがは、達人である。私は、異国の地で、すばらしいお世話係に出会った。運がいいとしかいいようがない。先輩のようにはいかないし、達人にもなれない。それでも、私にしかできない人生を探っていきたい。